千葉大学教育学部研究紀要　第63巻　418～410頁（2015）

岐路に立つ翻訳児童文学叢書
―一九六〇年代後半の普及と波及―

Abridged or Unabridged?:
Divided Views on Translated Literature for Children in the Later 1960s

佐藤宗子
千葉大学・教育学部

SATO Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九六〇年代後半の月刊誌『学校図書館』誌上における翻訳児童文学叢書をめぐる特集記事や時評を検証する中で、戦後の早い時期から児童文学の主要な媒介の場となった学校図書館の関係者たちが主要読者である本誌で、どのように「翻訳」の問題が議論されていたか、その問題点を明らかにしていった。そこからは、強く「完訳主義」を主張し、絶対的な児童文学評価の基準を信奉する児童文学者がいる一方で、むしろ柔軟な「翻訳」に対する姿勢を見せる海外児童文学の専門家の存在も明確になった。また、そもそもの議論の発端が学校教師という媒介者による必読図書選定にあったこと、文学全集隆盛の刊行状況があったこと、当時の刊行企画における海外受賞作乃至本邦初訳が必ずしも専門家からは評価されなかったことなども確認した。媒介者側の資料におけるこのような論議の経過自体、この時期における「教養」的な「叢書」意識の残存とみなせるだろう。

キーワード：児童文学（Children's literature）　翻訳（translation）　抄訳（abridged version）　教養（cultural education）　媒介者（mediator）

一

一九六〇年代後半は、戦後の高度経済成長を追い風に、児童書出版が大きく発展する時期であった。それはまた、そうした刊行物に収録される作品にも、新たな要求が出されることにもつながった。

これまで私は、第二次大戦後における少年少女向け翻訳叢書について、とくに一九五〇年代から七〇年代に刊行された主だったシリーズをとりあげ、「教養」形成の観点から追究を続けてきた。今回は、そうした叢書が実際に普及の場でどのような問題を提起していたのかを、学校図書館という場に焦点を当てて考えていくことにしたい。それというのも、小稿「「地域」から「領域」へ――一九六〇年代少年少女向け翻訳叢書における「教養」の転換――」（『千葉大学教育学部研究紀要』六二巻、二〇一四）で、六〇年代後半に講談社から刊行された「世界の名作図書館」シリーズを取り上げた際に、『学校図書館』誌上において同時期に、何度かの興味深い特集が組まれていることを知ったからである。

子ども読者に本を手渡す媒介者のなかでも、より指導的な立場にありうると同時に、出版社からすれば重要な顧客でもある学校図書館の関係者たちはこの時期に、児童書と児童文学の、何に、どのような目を向けていたのか。月刊誌『学校図書館』の六〇年代後半の誌面を対象として、これまで追究を続けてきた「翻訳」という問

題に意識を向け、さらにそれに絡む問題をも視野に入れた検討を行うこととしたい。

二

（1）

『学校図書館』は、全国学校図書館協議会（略称ＳＬＡ）が刊行し、小学校から高校までの学校図書館関係者を主たる読者対象とする月刊誌である。この団体は、現在は公益社団法人となっているが、そのホームページの「全国ＳＬＡの設立」という項によると、「「学校図書館が民主的な思考と、自主的な意思と、高度な文化とを創造するため教育活動において重要な役割と任務をもっている」（創立時の宣言）との思いで全国の有志教員によって」一九五〇年二月に結成されたものだという（http://www.j-sla.or.jp/about/index.html、二〇一四年九月三〇日閲覧）。『学校図書館』はその機関誌として創立の年の九月から刊行開始された。本論考が対象とするのは、基本的に一九六五年から七〇年まで、通巻一七一号から二四二号の範囲とする。ちなみに、七〇年はちょうど団体創立から二〇年に当たり、同年五月号では「全国ＳＬＡ創立二〇周年記念特集」が組まれている。

設立趣旨にもあるような役割や任務というと、やはり学校図書館の管理・運営が主要なものとなる。そのため、この雑誌の特集も、基本的には「学校図書館と図書の目録」（六五・二）、「蔵書の事故とその処置」（六六・八）、「図書館のしごと・新任の係の方へ」（六七・三）、「学校図書の予算編成と経理」（六八・三）、「図書館公費化の現状と問題点」（六九・一一）、「図書の廃棄基準とその手続き」（七〇・七）のように、かなり現実的で具体的な場合が多い。もちろん、児童・生徒に対する読書指導関連のテーマもしばしばみられる。

学校図書館というもの自体、この時期ようやく公的にその存在が認められ始めたといってもよいだろう。たとえば右の六九年一一月号の特集タイトルにしても、今日では、なぜそれが「問題」であるのかが理解しにくいのではないか。当該の号によると、公立の学校であってもそれまで図書の予算がつきにくく、そのためにたとえばＰＴＡの予算から図書費を計上してもらっていた実態がうかがえる。その場合は年度末であろうが年度当初であろうが、比較的自由に書籍が購入できたのに対し、公費化されたことで逆に使い勝手が悪くなった、といったことが問題とされているのである。学校図書館が、教育現場においてまだまだ発展途上におかれたものだったことがよくわかる。

そんな状況の中で、ＳＬＡが力を注いだ事業の一つが、読書指導の指針――『何をどう読ませるか』の刊行であった。同書が最初に刊行されたのは一九五八年のことである。小学校低学年、中学年、高学年、中学生、高校生をそれぞれ対象として、第一群から第五群までの五冊に分けて、それぞれ選定した書籍の内容紹介や利用の仕方について、まとめたものである。これはその後も幾度か改訂されていく――新訂版は六四年、三訂版が六九年、四訂版が七七年、五訂版が八六年、六訂版は群により刊行時期が異なり九四年から二〇〇〇年にかけて、となっている。改訂の間隔を見ればわかるように、新訂から三訂までの間がわずか五年である点が目を引く。そして、この二回の刊行が、今回検討する対象期間の直前と最中である点にも、目を留めておきたい。

さらにいえば、ＳＬＡが現在も続けている事業の一つ、青少年読書感想文全国コンクール――第一回は一九五五年度実施――で「課題図書」の部門が設けられたのが第八回の六二年度からであったことも考えあわせたほうが良いかもしれない。

すなわち、一定の基準に則って選定した本を提示する機会が増え、場が広がるとともに、その際の推薦基準に、外部からの批判の目が向けられやすくなる一方、内部でもどのようにすべきか模索され、外部の意見を聞こうとする。そんな中で、児童文学関係者たちの意見に耳を傾けようとする動きが、この時期に起きていたのではないだろうか。

（2）

学校図書館の専門誌であるのに、なぜか「児童文学時評」が毎号、掲載されている。しかも、他にはとくに「時評」欄はない――この時期の『学校図書館』の目次をざっと見ていくとまず気づくのは、その不思議さであろう。（関連記事掲載開始にさかのぼる調査は時間的な制約のため今回は行っていない。なお、今回の対象期間以降では、同名の欄掲載は七四年三月号までであるが、その後も「今月の潮流」というコラム欄でしばしば、児童文学者の寄稿が見られる。）もちろん、もっと細かい学校図書館関係の「ニュース」的な記事のページはあるし、他の機関紙などで補うその他の情報もあるだろう。わざわざ三～四ページを毎号「児童文学」の「時評」に割くということは、それだけ、当時の学校図書館において、単にどのような書籍が刊行されたといった情報にとどまらず、「児童文学」という立場からのいわ

ば「ものの見方」といったものが、求められていたと推測できる。

この時期の当該欄の担当は、おおむね一年間で三名程度が、毎回交代乃至は数回ずつ交代で執筆する、といった方式をとっている。具体的に執筆者を各年別に順に示しておく。（初回のみフルネーム、読みやすさのため半年分で改行）

一九六五年＝菅忠道、来栖良夫、関英雄、神宮輝夫、来栖、関、
神宮、来栖、関、神宮、神宮、来栖
六六年＝関、神宮、来栖、関、神宮、神宮、
神宮、来栖、来栖、来栖、関、関
六七年＝関、横谷輝、横谷、横谷、神宮、神宮、
神宮、来栖、来栖、来栖、来栖、来栖、関
六八年＝横谷、横谷、関、関、菅、（休載）、
古田足日、古田、古田、来栖、来栖、来栖
六九年＝塚原亮一、塚原、塚原、関、関、関、
横谷、横谷、横谷、来栖、来栖、来栖
七〇年＝塚原、塚原、塚原、関、（記念号で欄なし）、横谷、
関、来栖、塚原、関、横谷、来栖

合計六年間にわたっている割には、執筆者総数は多くない。また、それぞれに当時の日本児童文学者協会の主要なメンバーである。時評という性質上、そうした限られた批評眼のある人間に依頼せざるを得なかったということだろうか。

興味深いのは、時評ということで、新刊に触れる機会が比較的多いものの、単なる紹介ではないため、たとえば古田のように三回を通じて「現代のファンタジィを」という題を掲げ（六八年七月～九月）、現在求められるべきファンタジーの姿を追求し、まさにきわめて現在的な論考となり得ているものもある。あるいは関のように、ちょうど開催された「子どもの本、この百年展」に事寄せて『赤い鳥』と現代の問題を追究するなど、歴史的な視野を持つものもある。そうした展望やら状況論やらが種々含まれた、なかなかに興味深いコラム欄である。

また、特集としても一度、「創作児童文学」が組まれている。六八年五月号のことで、時評執筆者の一人でもある横谷が「「創作」児童文学の問題――日本の場合――」を、そしてこの後に翻訳問題の箇所で触れる鳥越信が「児童文学におけるおもしろさ――思想性とのかかわりと「変革の意志」――」を執筆し、他にはＳＬＡメンバーの教師たちが「創作児童文学に望む」といった論を数本、また小学校現場での調査結果などが掲載されている。その調査のうちの「小学生の間で多く読まれている創作児童文学」は、雑誌購読校から任意に選んだ一五〇校のうち回答が寄せられた四九校の集計ということだが、上位にあがったうちには前述の課題図書に指定されたものが四点含まれるとはいえ、後藤竜二『天使で大地はいっぱいだ』や古田足日『宿題ひきうけ株式会社』、大石真『チョコレート戦争』など、文学史的に今日でも高い評価を得ているものが多く挙げられている。「現代児童文学」が出発期から発展の時期に差し掛かった当時であり、学校図書館側も、そうした新しい創作作品を積極的に購入し蔵書にしていた様子がよく窺える。

しかしながら、当時の児童書出版全体から言えば、やはりより大きな割合を占めていたのはさまざまな叢書類であった。そして、翻訳叢書が、ここで大きな議論の的となるのである。

（3）

『学校図書館』の今回の対象期間中、児童文学の翻訳や叢書に関わる特集及び特集内の論が見られるのは、以下の号である。なお、「児童文学時評」で関連する記載が中心となっている号も、＊印を付して挙げた。

六五年三月号（通巻一七三号）
特集＝新訂版『何をどう読ませるか』 のうち
鳥越信「翻案書選定への一つの疑問――『新訂・何をどう読ませるか』を読んで――」…①
六五年四月号（一七四号） ＊
〈児童文学時評〉神宮輝夫「最近の翻訳文学について」…Ⅰ
六六年二月号（一八四号） ＊
〈児童文学時評〉神宮輝夫「古典の再話について」…Ⅱ
六六年四月号（一八六号）
特集＝文学全集と学校図書館
鳥越信「子ども向き文学全集――出版の現状と問題点――」…②
編集部「日本文学全集収載作品の作家別索引」（次号にかけて掲載）
六六年九月号（一九一号）
特集＝ほん訳文学をめぐる問題

安田保雄「翻訳と近代文学――上田敏没後五十年に際して――」
木島始「画一化をみだすリズム――ほん訳とほん訳者の条件――」
鳥越信「ほん訳児童文学の本もの・にせもの」…③
神宮輝夫「新しいほん訳文学の評価」…Ⅲ
大井源一郎「小学生の読書生活におけるほん訳文学の位置」
磯野岩男「中学生と外国文学」
筒井福子「高校生の読書生活におけるほん訳文学の位置」
編集部「子ども向け世界文学全集収載作品の作家別索引」（次号にかけて掲載）
六九年二月号（二二〇号）
特集＝翻案・再話の是非
鳥越信「完訳のすすめ――完訳以上の翻案・再話はぜったいにない――」…④
那須辰造「翻案の価値――完訳にこだわると児童文学の宝を失う――」
渋谷清視「「翻案・改作」児童文学の問題」
西郷竹彦「文学不在の翻案・改作――小・中学校国語教科書の文学教材――」
横谷輝「「翻案・再話」の出版の現状と問題点」
六九年三月号（二二一号）（＊）
特集＝出版の現状・評価
いぬいとみこ「翻訳児童文学――完訳・女流作家の作品・古典の再評価――」
〈児童文学時評〉塚原亮一「外国児童文学の意味――子どもは一体ではない――」
七〇年一月号（二二二号）＊
〈児童文学時評〉塚原亮一「翻訳のいくつかの問題」
七〇年二月号（二二三号）＊
〈児童文学時評〉塚原亮一「外国作品の研究について――ある研究会の報告――」
七〇年三月号（二二三号）＊
〈児童文学時評〉塚原亮一「作品の理解と評価」

ざっと見てわかるように、そもそもこの問題の火付け役は鳥越信である。そして、時評も含めて鳥越とは少し異なる立場からの論を展開しているのが、神宮輝夫であるのは興味深い。周知のように、二人はもともと、早大童話会における仲間であり、ともに「童話伝統批判」から「現代児童文学」の出発を牽引した論者同士であるからである。また、他にも目を向ければ、塚原はフランス児童文学者で自身翻訳も手がける。いぬいはといえば、かの『子どもと文学』（中央公論社、一九六〇）を執筆したメンバーの一人であり、ちょうどこの間の六七年には同書が福音館書店から再刊されている。

鳥越らの論を見ると、この時期には他の紙誌でも関連する翻訳関連の議論を交わしていたことが窺える。つまりは、この時期の児童文学批評における重要なトピックの一つが「翻訳のあり方」であったのだろう。ただ、この雑誌がこの間に二回も特集を組むほどにしたのは、理由があると考えられる。

そもそもの発端に目を向ければ、ＳＬＡの刊行した新訂版のブックリスト選定に、いわばケチをつけられたわけである。ＳＬＡが一年間に二回も特集を組み、会を挙げて『新訂版』の評価と活用を考えようとしていたことは、それだけこの新訂版刊行を重視していた証拠といえよう。それだけに、鳥越の批判は簡単に見過ごすことができないものであったと考えられる。なお、右記一覧には入れなかったが、六七年九月号では特集＝「ブックリストをめぐって」も組まれている。「何を薦めるべきか」という、基本的かつ重大な点に触れるだけに、この件に関する問題意識は継続して誌面にも反映されたといってよかろう。

では、具体的に、何がどう問題とされたのか。鳥越、神宮の論点、その他の論者の指摘を順にみていきながら、確認していくことにしたい。なお鳥越、神宮の論については、便宜上、前述の一覧に付した番号で論を区別することにする。

三

（1）

鳥越信は、①の論の冒頭で、「私は「ブック・リスト」というものにあたかも恋人に対するような特殊な感情を抱いている」と述べる。彼の考えによれば、「ブック・リスト」作成は真に多くの子どもの本を読んでいるはずのライブラリアンだからこそなしうる仕事のはずだからであるのだが、現実の日本では残念ながらそうはいかない。一九五八年に最初の『何をどう読ませるか』が刊行された時には「あまりのでたらめさに激怒」したという。そして『新訂版』は、「前のにくらべて格段の進歩を感じた」というのだが、「特にひっかかるのは、翻訳ものについて」だという。中学生対象の第四群においては三点を除いて「あと全部が原典の全訳である点がいい」とはいえ、「抄訳・翻案」は「たとえ三点でも、絶対にとってほしくな

かった」とまでいう。さらには小学生向けだとその占有率はより高くなる。ただ、鳥越は批判の理由をこと細かくは語らない。「何種類かのエディションを読みくらべてみると、必ず一ばんいいのは原作の全訳という結果が出る」としか述べない。その証拠として近所の母親たちとの読書会の例を持ち出すのだが、同様の結論を繰り返すのみである。しかし、彼の主張の基盤は、末尾に見ることができよう――すべての本に目を通すという原則を守れば必然的に「いい本」がわかる、という鳥越は、それに則った作業を通じて「そのもの自体が古典として残るような、理想的な権威あるブック・リストが完成するのだと思う」と確信的に言うのである。

そこからうかがえるのは、鳥越の児童文学における評価基準は、絶対的なものだということである。「古典」「理想」「権威」といった語の並びからもわかるように、「全訳」もまた、一つの原典に対応する唯一の「いい訳」であることが求められているのだろう。

②においては、少し別の指摘もしている。全集ブームが続く中で、世界の古典や名作を網羅したような総合全集について、それらがしばしば「居眠り企画」となっていると批判する。そうした企画の全集で見られがちな「おとなもの」の作品について「翻案・再話・抄訳」しての収録に反対の立場をとっているが、それだけでなく「そうした作品を加えることに企画自体の貧困を見いだす」からだというのである。また、世界の総合全集の場合、編者の専門とする言語圏が英米やフランスに偏ることで「ソヴェト、中国、イタリアなどがごそっとぬけおちて、「世界」が世界でなくなる」例も挙げて批判する。日本の全集についても近代文学の作品が「抄」として収録されること、「テキストとしての信頼性が全くない」ことを難じる。鳥越は「私たちが知りたいのは、常に真実の作品であって、それ以外の何物でもない。」と断言するのだが、ある作品に複数のテクストが存在することを前提として研究がされるようになった現在からすれば、彼の言う「真実の作品」追求は、何ともロマンチックに聞こえてもくる。

③については昨年の小稿でも少し触れたが、題名からして「本もの・にせもの」と対比させるなど、刺激的である。ここでも「翻案・再話・抄訳」がやり玉に挙げられ、その元凶として「全集というユニフォーム形式」が指摘される。そうした行為がなされるときに「原作をよりよく直した」との理由がつけられがちだが、それは「しょせん、口実」で、それがまかり通るところに「子どものものだからという、いわれのないさげすみの態度が見られる」とまで言う。「にせもの」は「悪い」が、その風潮がはびこる責任は「出版社と児童文学者と読者」（この場合の読者は、大人の媒介者を指す）だとし、「無知」でありがちな大人「読者」も、きちんと読み比べれば「偽物」を見分けられるという実例を挙げる。これは①で挙げた例と同じで、「ちびくろ・さんぼ真贋論争」と鳥越が呼ぶ、他紙で論争となったものの元の体験を指しているが、最後に「にせもの追放」を呼びかけて論は終えられている。

④も、これらの筋の延長線上にある。なぜ完訳でなければならないかの理由として、「第一の理由は、完訳に対して、完訳以上にすぐれた翻案・再話・抄訳はぜったいにない、という事実からである」と即座に断定してのける。第二の理由として権利の問題を挙げ、「海外児童文学の翻案・再話・抄訳は、明らかに人格権の侵害」と述べる。これは、近代以降の文学をはじめとする芸術の考え方からすればその通りではあるだろう。ともあれ、第一の理由に関しては、既述のような議論が繰り返され、翻案等の弁護論――原作の欠点補填、導入的役割、読者配慮――に対する反論――欠点のある作品はそもそも紹介すべきでない、他の海外の新作や日本の創作がある、異質の世界を知りたいという要求――を、次々に繰り出す。その一方でラムの『シェークスピア物語』は「小説と劇とは明らかにジャンルがちがう」ため、「脚色」であると擁護しているのは、ややおかしくも思える。結論としては、そうした外国作品の翻案等は「すべて敵対矛盾の本であり、悪書」と、手厳しい。ただし、「生活上の問題」からそうした行為に手を染めるということが現実にあることは認めつつ、要はその行為を合理化すべきではないというのである。（鳥越自身、「教科書という最大の悪書」作りに手を貸していることも明らかにしている。）

このように、鳥越の主張は実に明快で、一貫している。ただし、なぜ完訳が絶対的によいのかの説明は、具体的テクストに即しては語られなかった。そこから窺えるのは、いかにも近代的な思考としての「作者」尊重、唯一のテクストに象徴される「作品」という姿である。当然のことながら、「完訳」ということ・ものが、具体的にどのようなこと・ものであるのかは、自明のこととして触れられていない。そこに、一種のもどかしさも感じられてくる。

（2）

神宮輝夫は、英米児童文学の研究者・翻訳者であるだけに、翻訳の問題に関して、鳥越とは違った意見を提示する。

Ⅰでは、戦後の新しい翻訳児童文学の刊行が、岩波書店中心から変化してきている状況を紹介する。その中で生じた「古くてしかもあたらしい問題」として「抄訳問題」を指摘する。神宮は「再話は論外」とした上で、抄訳については差支えない場合を二例挙げる――一つは「作品が古くて長々しい教訓やむだな叙述がストーリーの展開をいちぢるしくさまたげている場合」(かな表記はママ)、もう一つは「抄訳して子どものときにそのエッセンスを読めば、あえて大人になってから読まなくてもよいと判断できる場合」だという。ただし、「二十世紀、それも戦後に出版されたもので、特に子どもの文学として発表されたものは、ほとんどその必要をみとめない。」興味深いのは、この最後の一文でも、「ほとんど……ない」として、鳥越のような断言は控えている点である。実際にさまざまな原書に接する立場からすると、どのような事例が出てくるかわからないという慎重な姿勢になるのだろう。また神宮も、抄訳横行の背景にある全集形式に言及しつつ、むしろ出版社の「あるものを大量に売ろうとする傾向の増大」を想定する。他方で、それに反して「個性豊かな作品が評価される」傾向が出てきていることも指摘し、具体的な作品名も挙げている。さらに、「良書の選択にも、もっともっと個性がほしい」と述べる。こうした発言をまとめてみれば、鳥越とは主張が異なることが明らかである。

Ⅱでは、Ⅰで否定した「再話」という方法だが、古典についてはそれを認め評価もしていることがわかる。子ども向きの聖書物語での、「細部への忠実さ」を長所として示し、「古典」に関しては何も「原典で、あるいは忠実な訳本で読まねばならないとは思わない」と述べる。他に多くの得るべき情報がある中での古典の位置づけを考え、「読みやすい形で古典を読めれば、それでもよい」というわけである。その時の読まれ方も、「知識や教養として」だけではなく、「おもしろ」く「強烈な物語性」があり、「人物像」が「単純で明快で、それでいて個性的」である点などにも触れて、要するに「子どもの文学の基本条件をすべてそなえている」ためとする。だから、一つの作品の再話にしても、「教養としての読書」に向く版と「物語性の点」でよい版を分けて示しもする。さらに、「北欧神話」のような場合、「翻訳文献だけを参考にしたものでも、再話がすぐれていればちっとも構わない」とさえいうのである。なんとも柔軟な発想であるが、逆に言えば、一点ずつをきちんと「読んで評価する」ことに対し、神宮自身は実行してきたという自負もあるのだろう。

またⅢでは、鳥越が②で「世界」が抜け落ちたと批判した叢書の編者の一人として、反論するところから出発する。「世界」を名乗る叢書の場合、「ほんとうにめぼしい国々をずらりとならべなくてはならないのか」と疑問を逆に突きつけ、鳥越が褒める類の叢書において、たとえば刊行済みのイタリア、中国、ベトナムの作品を取り上げて具体的な批判を展開する。「筋だけの物語」でも「その国の読者」にとっては意味があるだろうが、それは日本の読者にふさわしい翻訳作品ではないと指摘する。つまり、「あまり知られていない国の文学だから」とか「できるだけ網羅したいから」といった理由での作品選定は「まちがっている」、「要は作品のよしあしできまる」のだというわけである。さらに、他の企画叢書についても言及し、「賞の権威にも上下がある」し、「本邦初訳」は常識化していて「価値判断の基準にはならない」ことにも触れる。神宮はここでも「選択の問題」をあげて、叢書全体として評価するのではなく、「事大主義を排除」し、とにかく一点ずつの作品を「内容本位に評価」すべきだとする。

これらの神宮の主張は、自身が原書を読んだり翻訳をしたりする中から経験的に得たものであるだろう。しかも簡単ではあるが、具体的な例を挙げているだけに、説得力もある。ただ、価値判断は何か外的な基準で決められるのではなく、「ケース・バイ・ケース」となってしまうのであり、それだけ作品を見分ける眼を持たねばならないとなると、むしろ媒介者や読者にとって厳しさを突き付けているようにも思える。

（3）

ここで、他の論者の翻訳等に関する言及に目を向けてみよう。

今回の対象期間の最初、六五年一月号で菅忠道は、「１９６４年の成果と展望――創作児童文学を中心に――」と題した「児童文学時評」を、「文学の本当の意味で「全集」でもないのに何々児童文学全集と名のるものが、あい変わらず市場にはんらんしている。」と始める。なるほど、それがこの間の特集にも反映しているのかとあらためて納得する。

この年の、鳥越による批判を意識してか、六五年一二月号の特集＝「何をどう読ませるか」中の記事、「どう生かすか『何をどう読ませるか』」の第二群に関しての報告「実践への一つの素材」で潮木孝吉は、「書目選定の観点について」で、問題点を指摘する。「中学年向きの適書が少ないという出版事情からとかく世界名作にこだわりすぎ安易に翻案、翻訳ものを選定しがちである」と。ただし、結局選定基

準としては、五群共通の柱として『新訂版』にも示されている、「①読書の大系的指導、②読書による人間形成、③図書群の全体構成」の三つのほうが優位ということらしい。そうした指導すべきテーマに即して翻案・再話・抄訳がどのように選ばれたかは、別に機会を設けて検討すべき問題であろう。

一方、学校現場に立つ側からも、少し後にはもう少し明確な反応がみられる。六八年五月号の特集「創作児童文学」において、〈創作児童文学に望む〉「『おばあさんのひこうき』をとおして」で増村王子は、「世界名作だ、伝記だと、再話ものを大量生産して、署名だけで無知な大衆をだましていた長い空白時代を思えば、今の盛況は頽廃どころか、喜こ（ママ）んでいいことだとわたしは思う」と、創作児童文学の盛況をきわめて肯定的に捉える。翻って、「世界名作と銘うったものの中に、良心的でないものや封建時代の道徳を強調したもの、現代の子どもに受け入れられない作品がたくさんまだ氾濫している」ことを問題視する。鳥越らの指摘を、率直に受けとめつつ、テーマ優先で世界名作が選書されかねないことへの危惧も述べられていて、興味深い。

前掲一覧の六九年三月号のいぬい論は、「一九六八年に出版された作品を中心に、最近の翻訳児童文学を概括」するというテーマを与えられての執筆だが、そこでいぬいは、なぜ外国児童文学を子どもに紹介するかの理由について、「各国の子どもたちの生活や芸術的な体験や冒険などを、内側から交流させるため」であるとする。注意したいのは、ここで想定されているのは、現代の新作が中心だということである。いぬいは「原作者のオリジナリティ尊重のための完訳主義の姿勢」をとる「心ある出版社」という言い方をしており、近年の「原作の完訳をめざした出版物が常識化され」た傾向をよしとする態度がはっきりしている。さらに、一方でそうしたよい企画をする出版社が、他方で「ダイジェストもふくむ世界名作全集をだしている」現状を、実名を挙げて指弾する。ただ、たとえば一つの叢書のなかでも個々の作品ごとに評価すべきとの見方も示しており、彼女の考え方はある部分では鳥越に近く、ある部分では神宮に近いとも言えるだろう。

六九年以降、「児童文学時評」欄執筆陣の一人となった塚原亮一は、たびたび翻訳の問題に言及する。まず、六九年三月号の時評では、「戦前には想像もつかないような変わりよう」である翻訳状況を整理した上で、「外国児童文学移植の意味」について、明らかにする必要があると指摘する。また七〇年一月号では、小見出しに「翻訳は〝再創造〟」を掲げ、彼自身が体験したフランス語からの翻訳作業を引き合いにして、「言語構造のちがいよりも、言語感覚のちがい」に難しさがあると述べる。また少し以前の瀬田貞二が提出した論に目を向け、そこから「翻訳論の中心問題は、どの程度まで原文からはなれていいか（略）原文に対する訳者の自由のはんいにある」と抽出する。さらに複数の訳の読み比べから、「要は、どちらが原文の味わいを子どもに伝えているか」だとする。塚原の論からは、単純に形式から翻訳のよしあしを言うことはできないし、その判定ができるためには原語との対比等もできなければならないのでは、との思いを抱かされる。

こうして何人かの指摘を見てくると、子どもの「読書」をめぐってさまざまな考え方が存し、それらの差異がそのまま、「翻訳」に対する態度の差異となって表われているように思われる。

「完訳」対「それ以外の翻案・再話・抄訳」、「完訳」ということ・ものの内実、対象となる作品が「古典」か「一般の文学」か「古典的児童文学」か「新しい児童文学」か、英語圏の作品か、それに近い西欧の作品か、それ以外の地域の作品か、といった種々の項目が、論点となる。ただし、それらすべてを網羅しつつすっきりと合理的な法則がたつほど、事は簡単ではない。となると、それこそ鳥越のように絶対的な規準として「完訳主義」を掲げてしまうか、あるいは神宮のように一点ずつ吟味していくか、その二極に分かれていくことになるのも、頷ける。

（4）

翻訳のあり方について、議論が繰り返されるわりに内容はさほど進展しないまま、六九年にはＳＬＡの『三訂版』が刊行される。そこでは、鳥越の批判に応えてか、「第一章　どのような観点から図書群を選んだか」の中の、「（三）図書群の全体構成」の「（1）本の内容的事項について」の三項目として、「翻訳の問題」が設けられた。そこで示されたのは、「翻訳がすぐれていなければ、問題にならない」ことを大前提とし、「いたずらに完訳主義を主張するものではない」が、「日本語版には、問題の多いものが後をたたない」現状ゆえに、「児童文学の専門家の協力を仰ぎ、できるだけ原作の姿を、味を、そのまま伝えるような本」を探すという方針である。

つまりは、鳥越のような声高な批判を避けつつ、神宮の主張するような方向性をとったわけだが、そうなると実際のところ、学校図書館関係者のみでは選定が進められない。おそらくは、児童文学界における各出版社への評価といったあたりを参

考にして、選定作業が進められたのではないだろうか。

一例として、スティーヴンソン『宝島』を例に挙げておきたい。

五八年の最初の版では、選択されたのは、高垣眸による「世界名作全集」第二巻（講談社）であった。（もともとは五〇年初版だが、最新の刷によったか、五七年刊行とされている。）そもそもこの『何をどう読ませるか』では、現在入手可能な版を選ぶことが原則とされている。五〇年に刊行が開始された「世界名作全集」は、その後年数をかけて全一八〇巻にのぼる叢書となっていくが、とくに初期の名作の類は刊行後も広範に読み継がれており、それゆえに選定者たちの視野に入ってきたのはごく自然なことだったのだろう。

しかし、すでに私自身が過去に指摘したように、これは高垣ならではの創作部分を含む、要は再話である。（小稿「高垣眸『宝島』再話の挑戦――プロット再生の可能性――」、『千葉大学教育学部研究紀要』四八巻Ⅱ、二〇〇〇を参照されたい。）個人的には再話として一定の評価をしているが、たとえば鳥越のような論者からすればこうしたものを選定するなど論外ということになろう。

『新訂版』では、あかね書房「世界児童文学全集」収載の岩田良吉訳に替わった。そして『三訂版』では、「岩波少年文庫」の阿部知二訳が選ばれている。結局は、岩波のこの叢書なら文句は出ないだろうという判断がされたのではないか。というのも、『宝島』は名高いわりに、今日でも完訳版をきちんと読んだ率でいえば、必ずしも高くはないと考えられる。私見では、冒頭から船出までの成り行きがそれなりに複雑かつ長く、現代日本の、とくに子ども読者の興味を大いにそそるとは言い難い。作品としての興味性から言うなら、まず間違いなく高垣眸に軍配が上がる。

毎回の版ごとに、各巻巻末に付録としてつけられた「総合書目」における『宝島』の解説文が、「てにをは」の違いはあれ、概ね変えられていないところを見ると、案外選定者たちも、高垣版で読んだ記憶をもとにしつつ、推薦書として掲げる版だけを変更していたのではないかとさえ考えられてくるのである。

四

『学校図書館』の六年間の誌面を見ていて気づくのは、発行元であるＳＬＡと児童書出版社各社との間には離れがたい関係があり、それは同時に微妙な距離を持ってもいる、という点である。既述のような特集記事では、たとえばあかね書房、講談社等の各種叢書がしばしば実名を挙げられて論じられているが、一方で、各社は毎号、定期的に広告を出している。それこそ、批判の対象となっているまさにその叢書の広告も、誌面を飾っているのである。

あかね書房の場合、六五年一月号ではこの年の二大企画の一つとして「国際児童文学賞全集」を打ち出す。これは「受賞」作だからといってすぐれているとは限らないと批評されることになる叢書である。また、六六年五月号では「全巻本邦初訳」を謳い文句に「こども世界の文学」シリーズの広告を打ち、第一回配本『魔女とライオンと子どもたち』を宣伝する。間が悪いことに、翌月号から、見開きの右ページ（表二にあたる）で、岩波書店の広告として「ナルニア国ものがたり」シリーズが計七回、誌面に登場する。それも、「子どもの魂を正しくゆたかに導く　壮大な空想物語」との惹句が掲げられ、さらに初回の広告では神宮輝夫による推薦のことば――「原作のリズムを生かしたすぐれた訳文」とのタイトルがつけられている――まで掲載されて。それでもあかね書房はめげることなく、同叢書の宣伝をその後も時折掲載し、「オールカラー」「全巻本邦初訳」を謳い続ける。

鳥越に手ひどく批判された講談社「世界の名作図書館」シリーズも、七〇年一一月号では全五二巻完結の一ページ広告を掲載している。「図書館に必備！　世界の名作の決定版」との文言も出ているのだから、誌面における評論・研究の立場からの批判と、雑誌購読者である学校図書館関係者の意識は別物、という考えでもあっただろう。他の広告掲載者である偕成社、ポプラ社などにしても、世界や日本の各種文学全集、名作選の類を宣伝することが多いが、おそらくは同様の認識であったと思われる。

今回検証を進めた時期から四〇年以上が過ぎた現在、いわゆる文学全集は、皆無ではないという程度の存在でしかなくなった。そうした今日から顧みるなら、各種叢書を各社が次々に企画、発信し、それらが媒介され、また批評にさらされる状況は、むしろ「教養」としての「叢書」という意識が残存していたから生じていたことなのではないかと思えてくる。批判が強く出された講談社「世界の名作図書館」にしても、他方では神宮のように、収録作品個々を見るべきとの論があることを考え合わせると、そのような「世界」の「文学」を収められる「叢書」という〈器〉が機能していたからこそ、今となっては埋もれたものの刊行当時には意義ある翻訳と認められるものも世に出ることが可能だった。

一九六〇年代後半、飛躍的な児童文学普及の時期に、「翻訳叢書」という形態は、学校図書館という主要な普及の現場の関係者に、多くの波及効果をもたらした。「指導」という観点から「読書」を考える学校教師たちは、専門家である児童文学者たちの考えに耳を傾けようとしていた。直接に関わることのないテーマが取り上げられることがあるにせよ、毎号「時評」にページを割いたのは、そのよい証である。「翻訳」をめぐる議論にも真剣に向き合おうとしながら、実際のところは翻弄されがちであったにせよ、そこにおける論点を汲んで、書目選定に生かそうとしていた。

その後、新しい海外の児童文学作品が個別に完訳されることが一般的となり、翻訳児童文学という区分自体、それらを念頭に置かれることになっていく。

今回は『何をどう読ませるか』の内容やその変遷には直接触れなかったが、今後は特に『三訂版』に至るまでの過程にも目を向けるなら、少年少女向け翻訳叢書に対する、媒介者たちの対応をさらに追究していくことが可能となるだろう。

※　本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）「戦後の少年少女向け翻訳叢書にみる「西洋」と「東洋」――教養形成の追究」（課題番号２３５２０４１８、平成二三年度～二六年度）の研究成果の一部をまとめたものである。